

30 フランス人落語家・ステファン・フェランダス（2021年2月2日）

昨年末に、フェランダスさんが出演したオンライン落語会に参加しました。フランス語で落語を聞くのは初めてでしたが、違うのは言語のみで、まるで日本の落語を聞いているようで驚きました。

落語とは、17世紀以降の江戸時代に大衆文化として発展し、今も日本で人気の高い演芸です。歌舞伎や能とは異なり、舞台を盛り上げる音楽や華やかな衣装はありません。着物姿の落語家は、高座と言われる台の上で正座になり、扇子と手拭という限られた小道具だけを使って一人で何役も演じながら、話術で観客の笑いを誘います。



フェランダスさんは、アフリカやブラジルの昔話を語る語り部 (conteur) です。2007年に日本を旅行した際に、テレビで落語を見たのがフェランダスさんと落語との出会いです。その後、快樂亭ブラック (1858-1923。出生時の本名はヘンリー・ジェームス・ブラック。英領オーストラリア出身。後に日本人女性と結婚して日本に帰化。) という明治から大正時代にかけて活躍した落語家の活動を調べていくうちに、落語について理解を深めていきました。2009年に半年間、日本で落語を学び、2010年にフランスへ帰国してから、落語家としての活動も始めました。



フェランダスさんは、作家で演出家のサンドリーヌ・ガブグリアさんが作ったオリジナルの作品を演じています。日本で有名な演目をそのまま演じててもフランス人には理解することが難しいことから、ガブグリアさんの作品は、いくつかの日本の落語の演目を組み合わせて、フランス人に日本の文化が伝わるように工夫されています。



## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

フェランダスさんは、落語を通してフランス人に日本のユーモアの文化を伝えたいと考えていらっしゃいます。ガーブグリアさんは、ご自身の著書の中で、落語の魅力は、誰かを傷つけることなく、誰もが笑える滑稽な噺であると語っています。フランス人のプロの落語家は、まだ数えるほどしかいません。フェランダスさんとガーブグリアさんが作り出す落語がフランス人に笑いを与えて、フェランダスさんに続くフランス人落語家が誕生することを期待しています。